

## スケーターと蠟人形（高橋たか子『人形愛』考）

フィギュアスケートの世界チャンピオン羽生結弦の大ファンである。

努力によつて磨き上げた技術もさることながら、氷上で舞う姿の美しさ。長い手足とほっそりした首筋、切れ長の目。全身からオーラのように発散する「氷の精」とでもいえるような妖しいまでの天性の美貌は、つぼみが開花して絢爛たる華となっていく人生の中で最も清冽な年代の移り変わりを私たちに見せてくれる。アスリートとしての闘志を奥底に秘め、「ろうたけた」と形容できるほどの品格を持つ羽生結弦を私はどんな言葉でも言い尽くせないほどに賛美する。この時期の少年の美しさはいつの年代でも文学の題材になった。トーマスマンの『ヴェニスに死す』がまず頭に浮かぶ。ヴェニスへ旅行中の老作曲家が、船の中で出会った美少年タジオに理想の美を見出して彼の跡を追って彷徨い、最後は死にいたるといったストーリーだが、ルキノ・ヴィスコンティの監督で映画化され、いまだに私の中に鮮明な印象を残している。トーマスマンの体験にもとづいた小説でモデルの少年もあとで判明している。

羽生結弦から受ける幻惑は、長年にわたつて私の愛読書である高橋たか子の『人形愛』の主人公「玉男」を思い起こさせる。夜な夜な、小説の中で「私」の夢に出てくる蠟人形の美少年「玉男」が、私が現実に見ている「羽生結弦」とだぶって、いつしか小説と

一体化して、夢見心地で彼に入れ込んでいるのだ

2013年7月19日、作家高橋たか子の死亡記事が朝日新聞に載った。

「高橋たか子さん死去。「ロンリーウーマン」「怒りの子」など、女性の内面を追求した観念小説で知られる作家の高橋たか子さんが12日、心不全のため死去した。81歳だった。葬儀は近親者で行った。喪主は著作権代理人の鈴木喜久男さん。京都市生まれ京都大学在学中に、作家の故高橋和巳さんと知り合い、54年に結婚。58年、同大学院修士課程修了（仏文）。73年に『空の果てまで』で田村俊子賞、76年、『誘惑者』で泉鏡花賞、77年『ロンリーウーマン』で女流文学賞、『怒りの子』で読売文学賞、『きれいな人』で04年、毎日芸術賞受賞。学生時代からカトリック文学に興味を持ち、75年に洗礼を受けた。80年代にパリで修道院生活を送った体験をもとに、95年『亡命者』を発表した。」

その記事は大きいとは言えないものだったが私は衝撃をうけた。純文学系の複数の月刊誌に追悼文は乗ったのだろうか。あまり記憶にない。私にはひっそりと世を去ったという感が大きい。高橋たか子の熱烈なファンというわけではなかった。『邪宗門』や『悲の器』など、壮大な作品で文学史上に残る夫の高橋和巳の影にあつて派手な存在ではなかった。しかし『ロンリーウーマン』や『誘惑者』『没落風景』など、数冊の作品を読んだ感想では、そのテーマが、破滅に向かつていくものの美意識が主題になっていて、

その感性に強く惹かれるものがあつた。ここで取り上げる『人形愛』もその流れの中にあり、好きな作家のひとりである。例えば「没落は私にとつては美的なのである」とか「実」捨てられ荒廃しているのが美的なのである」「命の旺盛さを表すものは私には少しも美ではない」というように。

『人形愛』は1976年『群像』に発表され、のちに講談社から短編集の表題作として発行された。高橋たか子初期の作品である。内容は、簡単に要約すれば以下の通りである。

「私」は10年間の結婚生活の後に、夫を自殺によって失い、その前にも3年ほど付き合っていた恋人を、やはり自殺で失つた。「あなたの運勢が強すぎて、男を愛すると、その男は死の円のなかに入る」と占い師はいつた。しかし「私」に原因らしいことは思いつかず、一緒に生活することによって日常は「負」の方向に向かい、少しずつ死を溜めて命が下降していったとしか言いようがない。呆然と過ごしていたが、一月のある日、目的もなくH電車に乗った。(目的もなく電車に乗るのは私の癖である)。車窓から白い光が窓の外にちらつくのを見て、それがR山脈から採鉱される花崗岩が粉になって流れてきたのだろうと考える。ふと本源に近いT市に行ってみようと電車を乗り換える。

T市に近づくにつれて、白い光に満ちた住宅街の中に「幸せ」があるような予感があ

って、T市の二つ三つ手前の駅で途中下車をする。その街のなかに、結婚という出発点から「正」の方向に進んでいった頃の自分が任んでいるという確信を持つ。一時間ほど歩き回ったあげく、古い洋館の庭の前に行きついた。中年の女が銅製の如雨露で薔薇に水をやってている――。以前、家庭をもち、8年間も薔薇に水をやっていたころの幸せだった自分の姿がデジャヴとしてよみがえってくる――。

「このあたりにどこか泊まれるようなホテルはないでしょうか」と女に尋ねる。「ああそれならTホテルですね、Tホテルにいらつしやれば」と女は答える。私はTホテルに一泊してとても気に入り、いったん帰宅して長期滞在の準備をし、一か月後にまたホテルに向いて旧館での客になった。ホテルは前時代の優雅な美意識が感じられるが、窓ガラスの一部分が割れていて、間に合わせのカーテンが揺れていたりにして洗練された優雅に忍び込む荒廃が私の美意識によく合った。

ホテルに泊まった最初の夜に、私は「美しい少年の等身大の蠟人形」の夢をみる。蠟人形は17，8歳か、多くても20歳までの年齢とおもえる少年だ。私は「玉男」と名付けた。玉男からいつの間にか衣服が滑りおち、裸体が現れたので体の隅々まで愛撫する。「夢の雰囲気は目が覚めてからも昼間のあいだ、ずっと私を覆っていた」。玉男はやがて毎夜の夢に現れるようになる。

或る日の昼近く、ホテルのエレベーターのそばで、蠟人形と非常によく似た真つ白な肌の少年に出会う。透明で触れれば蠟がつくのではないかとさえ思えるような少年だ。

「玉男さん」と思わず呼び掛けてしまう。少年がとくに否定しなかったのが夢の蠟人形と現実の少年が「玉男」という名で完全に結びつき、夢のなかで昼の玉男と夜の玉男との二人の関係を深めていく。

夜ごとに、夢の蠟人形を愛撫することで、人形は人間のようになり、夜の玉男と昼の玉男がますます一体混然となっていくのだ。夜の玉男の器官を丁寧にもみほぐし、愛撫すると、玉男の中に隠匿めいた命が徐々に芽生え、温かみを帯び、その艶めきが私にとって「植物的官能性」となる。次第に蠟人形の玉男の官能は高まっていく――。

昼の玉男は、家族が外国に転勤してしまい、3月の大学受験のために一人でホテルに滞在し、受験勉強をしているのであった。やがてホテルの旧館のティールームで玉男と私は一緒に3時のお茶をしながら話し合うことが多くなった。二人の間で、フランスの画家、アルベルト・マルティニーニの「愛」という、花の交合の形をとった絵のことが話題になった。「花の開花が男女の交合によって人間化されてしまい、男女の交合が花の開花によって植物化されてしまつて」いるような愛。そんな、エロスの極致の性愛がある。花によって昇華された愛、それはやがて美しい玉男の全裸の股間から曼珠沙華が生え出てくるのを幻覚することになるのだ。

夜を重ねるごとに玉男の器官は生き物めいてきて、私と玉男との官能の交歓に聴覚が介入して思わず「玉男」と呼び掛ける。返事はなかったが、いまや人形の玉男ではなく、昼の玉男が傍にいと確信するに至る。「その夜も玉男は私の慣れた手つきによって目

覚めていき、火のついた蠟人形になった。最後の仕上げとし私は玉男の唇に口紅を濃く、濃く塗った」。

翌日、エレベーターの前で出会った玉男の唇に私ははつきりと口紅の痕跡があるのを見出すのである。

玉男の官能性が直物を連想させることに気づき、人間的なものの対極に植物的なものがあり、「人間界と植物界は完全に対応していて、だれか一人の人間に對をなす何か一本の植物が隠されているのだ」と私は信じるに至る。曼珠沙華よりも、もっと玉男にふさわしい植物を探しだし、それによつて愛を完成させようと思ひ立ち、山の上の植物園に向かう。花崗岩から湧き出る「白い光」が私の一步一步を包み込み、この土地全体がきらきらと輝くのを見た。

植物園にはバスとケーブルを乗り継いで山頂にむかった。園の中を歩きまわっていると、やがて荒れ果てた庭の奥にいくつもの温室が見えてきて、燃え立つような花々が現れてきた。原色に彩られた薔薇の饗宴であった

私の中を幻覚が沸き起こり過去が交差した。如雨露をとり、花の一つに水をやる。いつしか私は銅製の如雨露で朝夕に薔薇に水をやっていた自分を幻視する。——受験を終えた玉男はホテルを去つて、ティールームでいくら待つても私の前に現れない時が来るだろう。やがて昼の玉男は私の前から消えてしまうのだ。思わず「玉男」と呼び掛ける。

もはや玉男は美少年でもなく蠟人形でもない。「家をかまえて家族とともに住んでい

る私の「息子」となって「私」に帰属したのである。とそのとき庭のそとで靴音が近づき、髪振り乱した亡霊のような女が現れた。「おそれいりますが、このあたりで泊まれるようなホテルはないでしょうか」と問われ、私は女に答える。

「それならTホテルですわ。T市にいらっしやれば」  
そこでこの小説は終わっている。

『人形愛』は(1)と(2)で構成されていて、ともに次のような書出しで始まる。「私は玉男を待っていた。玉男は18歳である」。

また(1)のなかで私は中年の女に「このあたりで泊まれるホテルはありませんか」と尋ね「Tホテル」を進められる。(2)の終わりでは「私」は亡霊のような女に「このあたりで泊まれるホテルは」と聞かれて「Tホテルへいらっしやれば」と答える。メビウスの輪のように最初と最後がつながって、物語は終わりなく繰り返されることを暗示して、直線的な時系列の時間の流れに反する作品構造である。

白い光の中に幸せの象徴を見、家族とともに8年にわたって薔薇を栽培していた私とその姿に投影される洋館の女、それは高橋たか子が非常に好きだとエッセイに書いている「ドッペルペンゲル考」(文学界1974年4月号)において、「同時に異なる場所に現れる同一人、二重人、精霊、離魂者、酷似せる人」という、第二の自我、もう一人の自分、分身という観念だと説明しているが、それをそのままこの作品に表現しているよ

うに思う。なぜ好きなのか、それは自分というものを凝視していると、明らかに自分が二つに分裂しているということは、自分に対する面白さでもあり、気味悪さでもあり、長年の自己凝視がドツペルゲンゲルに注目したことは確かである、と説明している。

「家を構えて家族とともに住んで8年も薔薇に水をやっていく」という「正」の私と「私はいつも一人です」とつぶやき、周りを「負」に導いていく自分。人間が異なる二つの相に分裂しているという考えが根底にあるというドツペルベンゲル。その観念を扱った小説として、ヨーロッパの幾つかの作品を挙げているが、『人形愛』こそ典型的な例であろう。

玉男は「私」にとつて異性でありながら「男」ではない。玉男は私によって存在するのであり、「私」の愛撫がなければ冷たい蠟人形のままなのだ。また現実の玉男はエロスの対象ではないし、現世の肉の感覚は全く描かれていない。本来は無関係な少年である。また無機質な蠟人形でしかなかった存在を、想像の世界で時間をかけてゆつくりと自分の所有物へと作り替え、自分の「自己愛」にふさわしい存在にしていたのだ。現世で愛することをしない女は現実の愛の対象を必要とせず、幻想の愛だけで十分だという頭だけの観念的な作品だとは到底思えないし、現実拒否でもない。結局作者の愛への渴望が二人の玉男を作り出し、決してこわれることのない愛を二人の玉男に構築したのだからか。現実の私は荒野に立って「いつも一人です」とつぶやくのだろう。

ホテルの滞在客で知り合った初老の夫婦がいる。二人は「宝塚歌劇」を見るためにT



市にやってきたようだ。初老の男は言う。「少女の美しさは年を取った男が発見するものだよ」。まさしくそうなのだ。少年の美しさは年を取った女が発見するものだ。

わたっしは

また高橋たか子は『性——女における魔性と性』岩波書店1976)で次のように述べている。「私が小説を書くとき、小説の中へと登場してくる女主人公たちがどれもこれも魔性の女であることに気づかされるのである。なぜか、私が自分というものを開放して書けば、ますます魔性がのさばりだしてくるのである。私がいくら小説を書いても母性は登場してこないのである」

母性の希薄な『人形愛』において「私」にもたらされる神の恩寵のような人形に対する愛は、扱いを間違えれば溶けてしまいそうな蠟人形なのだ。性愛にも、すべてのものにも乾いていて満たされない中年の女性の、偏執的な愛をえがいた小説といえると思う。

高橋たか子は三島由紀夫に傾倒し、フランスの作家フランソワ・モーリヤックに影響を受けたとたびたび書いている。三島由紀夫の『愛の渴き』を読んだとき、私はまさしくモーリヤックの「テレーズ・デスケル」がそこにいると思ひ、また高橋たか子の『誘惑者』を読んだとき『愛の渴き』の悦子がそこにいると思った。たか子の描く登場人物の多くは二人が描く「限りなく渴望している」女に、実に共通点があると思うのである。

高橋たか子は遠藤周作の導きによって1975年カトリックの洗礼をうけた。その前

と後では作品に差があるように思うが、受洗後についてはあまり知らない。フランスの修道院で一年ほど生活し、その当時の心境などをエッセイに書いているというのがほとんど読んでいない。洗礼をうけた作家は数多くいるが、修道院に入ったというのはめずらしいのではないかとおもう。同時代の作家曾野綾子も受洗しているが、作風も思想も志向も全く異なるので比較の対象ではない。やはり同時代の作家木崎さと子もカトリックの信者である。三浦綾子もそうであった。信仰を正面に据えて書く作家もいれば信者と聞いて首をかしげるような作風の人もいる。瀬戸内寂聴は、あれが得度した尼僧かと驚くばかりである。

信仰生活について書いたものをあまり読んでいないので修道院でどのように過ごしたのか、私にとって今後の課題である。京都生まれであるが京都の男尊女卑的な風土を嫌い、晩年は夫高橋和巳と別居して鎌倉に住んでいたらしい。茅ヶ崎の老人ホームに入所していたとき、心不全で亡くなったことを新聞紙上で知っただけである。

高橋たか子には『自選小説集4巻』があるという。それらを読んであらためて全体像をつかみたいと思っている。

それにしても「時の流れ」は残酷である。羽生結弦の老年の姿を思い描くことはできない。「青年は限りなく美しく、老年は限りなく醜い」と三島由紀夫は言った。「美しいものを永遠に保つたためには滅ぼす以外にない」と言って『金閣寺』の主人公林養賢は金

閣寺を焼いた。また、三島由紀夫は1970年、当時匂うばかりに美しかった歌舞伎役者の坂東玉三郎を次のようにたたえた。

「この人のうすばかげろうのような身体が舞台の上でしなしなと揺れるとき、ある危機感を伴った抒情美があふれ出る。気品のある古風な美貌なのである」・

この言葉を私もその通り羽生結弦にささげたい。60代になつた玉三郎は今なお美しさが枯れることはない。羽生結弦を永遠に現在の姿にとどめるためには……



アルベルト・マルティニーニ「愛」